



TITLE:

<論文>国際交流キャンプにおける
子どもとおとなの学び：「国際子ども
村」の参与観察から

AUTHOR(S):

王, 雯

CITATION:

王, 雯. <論文>国際交流キャンプにおける子どもとおとなの学び：「国際子ども村」の参与観察から. 京都大学生涯教育フィールド研究 2013, 1: 35-42

ISSUE DATE:

2013-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/174242>

RIGHT:

【論文】

国際交流キャンプにおける子どもとおとなの学び —「国際子ども村」の参与観察から—

王 雯

Learning of Children and Adults in the Experiences of International Exchange Camp; A Report from “International Summer Villages of Children”

Wen Wang

1 はじめに

学校教育において、子どもは教師とのタテの関係と、同じ年齢の子どもとのヨコの関係の中で学んでいる。では、学校外教育では、様々な文化背景と異なる年齢層の人との関係で、子どもはどのように学んでいるのか。本稿は、学校外教育の1つ、国際交流キャンプに焦点を当て、そこへの参加の中で見られる学びの実際を探る。そして、子どもの参加者だけでなく、おとなの参加者も、互いの学びにどのように影響しあうかを中心に、考察したい。

2 国際子ども村の意義と位置づけ

まず、国際子ども村という団体を紹介する。「国際子ども村」とは「体験から学ぶ」方法で、平和教育を行う団体である。正式名は、「Children International Summer Villages」であり、CISV と省略する。国際子ども村は「教育を通して、より公正で平和な世界へ向けて意欲的に行動する地球市民を育てます。1951年より地域活動、国際キャンプ、家族ぐるみの交換ホームステイ、地域に根ざした社会活動等、様々な活動を行ってきました。行われた活動は『プログラム』と呼ばれています。プログラムは毎年60カ国以上の青少年と成人を対象に開催され、全てボランティアによって運営」(CISV パスポート、2012) 1されるという。

国際子ども村はプログラムを通じて、61年にわたって、毎年何千人もの参加者に自分とは違う国、背景、文化を持った人たちとの出会いと友情を育む機会を提供してきた。そもそもどのように、何の目的で成立したのだろうか。国際子ども村の構想の芽となったのは平和教育である。第二次世界大戦終結から1年後の1946年8月11日、児童心理学者、ドリス・アレン博士はニューヨークタイムズのある新聞記事に目を留めた。その記事にはユネスコ設立と関連して、世界平和のための成人教育を目的とした専門機関の設立が提唱されていた。「平和な世界の構築を目指した努力が実らないかは、このような成人教育に掛かっている」と提唱者は述べた。

戦争の悲惨さに心を痛めていたアレン博士は、この記事に強く触発されると同時に、全

く違うことを考えた。「平和な世界を築いていくのに重要なのはおとなでなく、子どもの中に『人種・文化に対して偏見のない心』を育てることから始まらなければならない」。この考えは、その後に参加したアメリカ心理学学会での討論を経て、博士の中で確信に変わり、国際子ども村の構想が最初の芽を吹いた。その後の5年間、博士はメキシコ、スイス等を訪れてユネスコ関係者等と交流し、国際子ども村の構想に多くの協力者を得た。そして、ユネスコの資金援助も得て1951年、「第1回 Children's International Summer Camp」がオハイオ州シンシナティで開催された(法人 C.I.S.V.日本協会、2007)²。それ以降、子どものキャンプから、年代や階層を超えた国際交流プログラムの種類が増え続けてきた。

3 本参与観察の目的、および概要

筆者は2011年4月から、「国際子ども村」のボランティア活動に関わっている。2011年7月の3週間で、日本の高校生3人を連れて、チームのリーダーとして、イタリアで開催するサマーキャンプに参加した。派遣前に半年間のリーダー研修を受け、派遣後に次のリーダーの育成に関わった。今までの参加の過程で、筆者が得られた資料と調査結果、観察したことや体験も踏まえ、以下に参与観察の記録をまとめた。

(1) 観察の目的

「国際子ども村」という国際交流活動をする団体における参与観察を通して、学ぶ空間、子どもとおとなの関係、学びを促進する要因を明らかにする。

(2) 観察対象者

観察の対象となったのは、2011年度NPO「国際子ども村」主催のサマーキャンプ参加者、計52名であり、内訳は次の通りであった。

子ども35人(年齢は16歳と17歳、出身はアルゼンチン、ブラジル、フィンランド、香港、イタリア、日本、ルクセンブルク、スウェーデン、アメリカの9か国)。

リーダー9人(20代8人、40代1人)

スタッフ4人(19歳1人、20代2人、30代1人)

キッチンスタッフ4人(全員16歳)

筆者がリーダーとなった日本チームは、日本人の高校生3人からなる。

(3) 参与観察期間

同上キャンプ実施期間(2011年7月8日～7月30日)

(4) 参与観察場所

同キャンプは、イタリアのボローニャに近い、レジョオ・エミリアの郊外小学校で実施された。同所は緑に囲まれ、設備が整っていた。キャンプ前に、リフォームされたので、非常に綺麗だった。

4 参与観察の概要と考察

(1) キャンプの概要

① テーマとして掲げられたこと

キャンプのテーマは「平和づくり (peace-making)」であり、副テーマは「巻き添え被害 (collateral damage)」である。

② キャンプの主な日程

- 7月8日～10日 リーダーがトレーニング、子どもがホームステイ
- 7月10日 子どものキャンプ イン
- 7月14日 日本の文化を紹介する日：浴衣とセーラー服を着て踊りを披露し、日本の文化を紹介し、日本のゲームを全員でやった
- 7月17日 オープンデイ：民族衣装を着て、キャンプを開催支部の会員や地域住民に紹介
- 7月21日 遠足：大虐殺の遺跡と記念博物館の見学
- 7月22日 リーダーのナイト アウト
- 7月24日 2つのキャンプの合同行事
- 7月25日 プール
- 7月27日 ボローニャ観光
- 7月28日 キャンドル ナイト
- 7月29日 全員が体育館で寝た。参加者全員は、朝まで全員へのメッセージを書いた。
- 7月30日 キャンプ アウト

③ 一日の活動の流れ

8:00 起床	13:15	19:00 夕食、Kittos
8:25 フラッグ アップ ³	14:00 シエスタ (静かに過ごす時間)、ショップ ⁶	20:00 アクティビティ
8:30 朝食、Kittos ⁴	15:00 アクティビティ	22:00 シャワー、ミーティング
9:15 清掃	17:00 各チームの時間	23:00 フラッグ ダウン、ララバ イ ⁷
10:00 アクティビティ ⁵	18:00 プランニングの時間	24:00 就寝
13:00 夕食、Kittos		

(2) 活動の実際

①第1週目 (7月11日～17日)

日本から参加した高校生たちは、英語を聴き取るのが一生懸命で、自分の意見を言う余裕がなかった。英語圏出身の子どもが大きなグループがつついたが、日本チームの高校生はなかなか入ることができず、毎日3人で遊んでいた。時々、ホームシックになったり、英語を話せなくて落ち込んだりしていた。

リーダーである筆者は、日本人の高校生たちにできるだけ全ての英語を通訳しようと思うが、全ての会話を正しく日本語に訳すことが出来なかったので、落ち込んだこともあった。そして、それ以上に、リーダーとスタッフは、毎日深夜までミーティング、プランニング等が入っていたために時間的余裕も少なかった。また、この週に、日本チームが「自国の文化を紹介する日」もあった。前もって、チーム全員でダンスを練習し、おにぎりを

つくり、準備していた。十分に準備したために、他のメンバーから好評を得ることができた。高校生たちは、積極的に参加する意欲もわいてきた様子があった。

②第2週目（7月18日～24日）

日本の高校生もは徐々にキャンプの生活に慣れてきて、友達も作り始めた。日本を大好きなスウェーデンの男子と毎日一緒に遊んでいた。そして、高校生たちは、プランニングの時にも、ディスカッションの時にも少しずつ話せるようになった。この週、アクティビティをする日もあり、遠足など特別な日もあった。すべてのアクティビティを通して、参加者は、「平和」という言葉について一層深く理解することができた。

例えば、第二次世界大戦下のイタリアでの大虐殺の遺跡とその記念博物館を見学し、当時の経験者である80代の女性の案内の下で、戦争や平和についての認識が深めることができた。また、観光の日、ボローニャ駅で全員が面白い写真を撮って帰ってきた後で、昔この駅がテロリスト事件に遭い、爆発が起こった事があったという話があった。そして、その当時の写真が見せられ、その悲惨さに、参加した子どももおとなも心身ともにショックを受けた。その夜、全員キャンドルを囲み、自分の国の言葉で書いたり、自分なりの絵で表現したりすることで、「平和」と「戦争」について語り合った。

③第3週目（7月25日～31日）

日本チーム3人の高校生は、最初は自由に英語を使ってディスカッションや話し合いが出来なかったが、毎日少しずつ自ら頑張ることや、ほかの国の若者たちと助け合うことを学び、第3週目になると、自分の意見を言えるようになった。

特に、高校生は互いに尊重し合い、各国の多彩な文化を、普段の何気なく会話から身につけ、異なる価値観から学んでいるようであった。語学の高い壁を超えながら、楽しみも悲しみもシェアし、おとなと子どもと共に成長していることは、一番の喜びであると感じられた。そして、キャンプ生活を毎日楽しめるようになっていったために、日本に帰りたくないという日本の高校生が言うようになった。

5 参与観察から得られた知見と課題

このような国際交流の場という学ぶ空間において、子どもとおとながどのように学んでいるかに焦点を当てた参与観察から得られた知見をまとめると、次のようになる。以下、各々の知見について、具体的な考察結果を交えながら解説したい。

(1) おとなと子どもは学び合える関係である。

国際子ども村の日本支部では、大部分の参加者は子どもが11歳から大人になっても長期間で関わっており、バリエーションのある関わり方で家族2世代、3世代が同時に参加している。その活動は、様々な背景を持つ、年齢の幅が広い人に開かれ、「教育」ではなく「気づき」、「勉強」ではなく「体験」といった学び方で、参加しやすい空間がデザインされている。「気づき・体験」から学ぶということを、通常の運営からも意識し、参加するすべての人々に楽しんで学べることが重視されている。

同団体が61年間の活動の経験と膨大な資料をインターネットで公開していることは、

重要な学習のリソースとなっている。貯蓄された経験は、あくまでも過去の特定の時間・空間の知である。そのため、各国の日々進化している中で、長年の実践知が受け継がれていくには、現在関わっている一人ひとり（子どももおとなも含んでいる）の力に左右されるのが現実である。そして、活動において「自分が参加している」と感じられるよう、おとなの力と子どもの力をバランスよく使うことが、重要である。

そこでは、おとなは「ヘルパーの存在」だと言われるが、実際は子どもとともに学んでいる参加者の 1 人である。子どもの参加へのサポートが、様々な場面で求められているが、リーダー、スタッフ等のおとなたちの間でも、互いに「サポートし合う」ことは欠かせない。

筆者が派遣されたキャンプでは G という誰にも信頼できるスタッフの存在がいた。40 歳でデンマーク国籍の彼は、国際子ども村のスタッフとしての経験が長い。いつもキャンプの全体的な様子を確認し、良い方向に向かっているかどうかを確認している。また、子どもの面倒を見る一方、リーダーたちの状況も常に心にかけている。筆者がリーダーとして子どもとの関係を悩んでいる時に、私の郵便箱に G からの手紙が届いた。

Dear Kathy! I just wanted to tell you that I think you are doing an amazing job as a leader. I know you have had a hard time sometimes with you delegation, and still have now and then with all the translations. But you should know that you are a great person and that I am happy you are here. Keep up the good work.

その時の励ましは、筆者にとって「無限大」ともいえる多大な影響力のあるものであった。一人前のリーダーとして、いかにやんちゃな高校生と付き合うかを強く励まされた。また、参加者のリーダーとスタッフのおとながサポートし合うことは、普段の運営でもプログラムの参加でも欠かせない。こうしたおとなが助け合うことは、子どものすぐそばにモデルとして、学びやすい自然の教材になっている。このように、おとなと子どもが対等な関係で、子どもに近づきやすい、学びやすいモデルになることは、おとなの役割の 1 つである。

しかしながら、現在緊急な課題でもあり、日本支部の常に抱えている悩みとしては、次世代リーダーの育成が挙げられる。子どもが海外の教育プログラムに参加する時、引率者としてのリーダーの役割は極めて大きい。子どもの面倒を見ることはもちろん、子どもが実際の参加で本当に学んでいることも、手伝わないといけない。子どもの発言を引き出し、子どもの主体性が発揮できるよう、まさに補完的に支えるおとなの役割がある。子どもを一人の人間として見ないような固定観念に縛られたおとなたちと子どもとの間に入って、子どもからおとなに伝える場を調整する、コーディネーターやファシリテーターである。

さらに、子どもが次に参加するかどうかは、リーダーの積極的な呼びかけ等の影響も大きい。多くのリーダーは、子どもの時から参加し、大学生や社会人になると、リーダーとして関わる。海外へ派遣された後、また次のリーダーの育成に関わる。派遣前の楽しみ、派遣時の責任、派遣後の貢献に変わることがある。そこで、参加は最初の「楽しみ」から、「責任・貢献」へ、さらに「負担」となるというふうに変化しやすい。ルパー・アドバイザー側に立つリーダー、スタッフにしても、「いつも、自分も楽しんでいる」ことが重要だ

と考えられる。平等に楽しく学びあえる空間づくりは、1つの学ぶ空間に参加する意味につながるであろうか。

(2) 子どもとおとなは尊重し合う関係である。

「国際子ども村」は国際性がある一方で、言語と文化の違いが、子どもとおとなの参加の阻害要因になりやすい。この点については、同団体が発足した時点から、子どもとおとながいかに対等に参加できるかの工夫がなされてきた。

この工夫は、11歳の子どものためのキャンプのプログラムの理念に見られる。筆者が参与観察している時に配られた内部資料では、「なぜ11歳なのか」というこのキャンププログラムを紹介の部分がある。そこでは、まず11歳が「生理的に比較的安定し、青年と比較して感情的に比較的安定していて感情の起伏が少ない」時期であると書かれていた。そして、「彼らは容易に新しい経験を受け入れられる、彼らは多くの国籍の持つ者や言語の中で一緒に生活して楽しむことができる。彼らは言語を気にしない、彼らの年齢は間違ふことを恐れず、どんどん新しく学んだことばやフレーズを試す。彼らは簡単に他の子どもとコミュニケーションする。共通の言葉がない場合、彼らは自発的に身振り言語や絵、ドラマを使う」と、11歳の特徴がとらえられていた。

また、実際のキャンプでメンバーが対等な関係を保つために、自分への尊重と他人への尊重の両方が重要視されている。これは国際子ども村の4つの教育理念の1つ目として、「私たちは互いに似ていることを認め合い、同時に互いの違いを尊重します」と規定されている。

これに関わる事例をあげてみよう。筆者が参加した16歳に高校生向けのキャンプでは、「子ども自身がここにいる意味を探す」という活動がある。キャンプを子どもの意見を尊重し、自主的な管理を求めため、キャンプミーティングが設けられている。全員の投票で、子ども会議の委員長として選ばれたアメリカの女子Mがいた。Mは国際子ども村の参加経験が豊富で、母国のアメリカでもジュニア・ブランチのリーダーとして活躍している、一回目のミーティングでは、子ども全員が相談し合い、キャンプのスケジュールとルールを決めた。しかし、あまりにもルールが守らない子どもがいたので、Mは何回も涙を流した。「自分達で決めたルールを守らない人に失望した」と彼女は言った。そこで、彼女はリーダーたちと相談し、「自分がここにいる意味を探そう」と提案した。キャンプ全員でアンケート調査を行い、それが皆がキャンプへ積極的に参加する気持ちを促すことに繋がった。

また、異なる文化の子どもたちの付き合いでは、互いの尊重も同じく欠かせない。キャンプでの事例を挙げてみる。ブラジルチームが自分の国を紹介する日のことであった。ブラジルという国を皆に伝えるため、「Poor and Rich」というゲームがあった。全員が配られたお金でしか食べ物を買えないというルールがあった。その時、日本の高校生Mは、このゲームについての不満を英語でうまく伝えなくて、ブラジルの子どもと口喧嘩をした。ブラジルのリーダーから、ブラジルのチームは自国の文化を紹介する日を精一杯準備し、ほかの高校生に楽しんでもらいたかったと聞いた。ブラジルの高校生は、自分の国について全力で準備したことを、活動を通じて伝えたいつもりだった。しかし、日本の高校生も含め、5名の子どもが不満をもった。そこにいる高校生たちは、ほかの高校生の努力を大

切にしていない、違う国の文化を尊重し理解しようという姿勢は、積極的なものではなかった。キャンプで実施したアンケートにもよると、友だちづくりは、多くの子どもが参加目的としていたことであった。しかし、友だちをつくる時に、お互いの国のことを知るといふことには前向きではなかったことも見られた。

以上の事例では、日本の高校生 M がその時の不満を、リーダーである筆者に一気に発散させた。こうした状況に初めて出遭った筆者は、彼女の気持ちを慰めようとしたが、逆に嫌われてしまった。筆者はその時、どのように子どもの精神的なサポートをしていくかについての知識やサポートが欲しいと強く感じた。

さらに、リーダーは毎日子どもの様子に目を配ることに力を入れたが、「自分も楽しむ」ことが時々忘れてしまいがちである。高校生たちに一杯学んでほしいが、自分自身が積極的に学んでいるかどうかを確認することについては、つい忘れてしまう。つまり、子どもとおとなが対等な関係であれば、ほかの人が楽しめているか、自分が楽しめているかということも、平等な立場にあるはずである。お互いのニーズを尊重することも、自分自身の学びに繋がるということを実感した。

(3) 葛藤から生まれた学び

同キャンプでは、異なる文化的背景をもつ人々とのつながりにおいて、常識を覆すような出来事があったり、彼らとの付き合いの中で別世界の知識と遭遇したりすることで、刺激的な学びを得ることができた。つまり、今までの「当たり前」を再認識しつつ、自身の判断基準や価値観を再構築し、その後の人生の選択を左右するような体験でもある。

1つの団体に長期的に関わるなかでは、「楽しさ」だけでなく「悩み、苦しみ」にも向き合わざるをえない。例えば、英語を話せない子どもは、国際プログラムに参加する時、外国の参加者と話せなくて苦しんでいる。話したいのに話せないという葛藤の状態は苦しい状態ではあるが、一方で、様々なアクティビティにおける身体表現やゲーム、歌等で他者と空間を共有する高揚感や身体感覚を楽しんでいる。

このような非言語的なコミュニケーションを介して築かれた人間関係における充実感、葛藤を抱えつつも、また次の参加でもっと学びたい意欲につながると思われる。葛藤と喜びが共存する中で、人々は個々の課題や目標を見だしつつ参加している。よって葛藤が生まれることは、学びを生み出す最大の要素といえる。これは、「『困った状態を何とかしたい』と思った時に、学びが発生する可能性が高くなる」(美馬のゆり、2005)⁸という指摘に通じるものと思われる。

つまり、人は葛藤する状況に追い込まれることで、苦しみと楽しみを同時に感じているのではないだろうか。「苦しいのだけれど、本質的にはおもしろいという一見矛盾した感情を上手に共存させること」(美馬のゆり、2005)⁹が、学びをデザインする上で重要なのである。

「国際こども村」の活動は、「なぜ自分が困っているのか、どう解決するのかと自分自身に問う」ために、デザインされ、改善されてきた。参加者の葛藤が生まれる空間をデザインするという工夫のほか、参加者自身が参加した活動を振り返る、一般化する、応用するというプロセスも「自分自身に問う」活動として含まれている。そして最終的には、活動から学んだことを、新しい状況にどのように応用できるかを考え、実際に行動に移すこと

ができるかということまで考えてデザインされている。このように、楽しみつつ、葛藤を乗り越えられるような体験を享受できる空間づくりも、重要な課題であると言えよう。

6 おわりに

本稿では、国際こども村という1つの学びの空間で、子どもとおとながどのような関係で学んでいるかを検討してきた。今回の参与観察では、学び合える子どもとおとなの学ぶ様子を観察した。そして、「葛藤」という要素が学びを促進することも分かった。

中国国籍である筆者自身にとって、日本チームのリーダーになること、実際のキャンプで外国語である英語と日本語を話すことは、貴重な体験であった。その時、筆者は、主体的な参加者意識を持ち、自分も楽しく学びたいといつも心にかけていた。本報告が、筆者のように、国際交流活動において、葛藤に直面しながらも、参加して学びつづけたい人に役立つものとなれば幸いである。

注

- 1 「CISV PASSORT for ACTIVE GLOBAL CITIZENSHIP (CISV パスポート日本語版)」2012年3月、P8
- 2 社団法人 C.I.S.V.日本協会著「CISV 日本協会 50周年記念誌」2007年10月6日、P12
- 3 **Flag up:**国際子ども村の旗に集まり、各国の言語でおはようと言ひ合い、また CISV SONG を歌う。
- 4 **Kittos:** 食事のあと、円になって毎回歌う(叫ぶ?)、食事に感謝する意味で、スウェーデン語、フィンランド語、ノルウェー語のミックス。
- 5 **アクティビティ:** 各種のゲームやデイズカッション等様々な活動を行う。
- 6 **JC ショップ:** ジュニア・カンセラーが運営する菓子や葉書等を販売する模擬店。
- 7 **ララバイ:** Lullaby、様々な歌をみんなで歌う。
- 8 美馬のゆり、山内裕平著『『未来の学び』をデザインする—空間・活動・共同体』東京大学出版会、2005年4月20日、P179
- 9 同前。